

レクリエーションバレーボールに関する研究

—— クラブ参加とコミュニティ活動 ——

堀 賢 治

(保健体育研究室)

(昭和60年10月11日受理)

目 次

- I 緒言
- II 方法
- III 結果と考察
 - 1. 過去のスポーツ経験
 - 2. クラブ参加の現状
 - 3. コミュニティ活動
- IV 結語

I 緒 言

東京オリンピックを契機として家庭婦人バレーボールクラブは著しく増加した。しかし、過去の研究によれば、クラブへの参加者は、学生時代のバレーボール部経験者が約半数を占め、¹⁾ また、全国大会出場を目指すために競技志向に走るクラブもあることが指摘されている。²⁾ ³⁾ そのために、スポーツ経験の乏しい人やバレーボール初心者の人たちが、新しくクラブへ加入したいと思っても、なかなか参加しにくく、加えて、すでに加入している人でも、高年齢になれば体力的・技術的についていけなくなり引退を余儀なくされている。このような傾向は他の種目にもみられ、それがためにコミュニティスポーツへ参加する人は限定されてくるといわれている。

また、最近の社会教育の方法として、スポーツ活動から趣味・学習活動や奉仕活動へという方向がある。⁴⁾ ⁵⁾ しかしながら、スポーツにえんのない人はスポーツ以外のコミュニティ活動へなかなか参加しにくいという問題もある。

このようなコミュニティにおける諸問題を解決する一つの方法として、誰もができる新しいコミュニティスポーツとしてレクリエーションバレーボール（以下レクバレーという。地域によっては、ミニバレー、⁶⁾ ビーチバレー、⁷⁾ などの名称で呼ばれている）が考案された。

そこで、本研究においては、第一に、レクバレーは家庭婦人バレーボール（以下家庭婦人バレーという）とどこが違うのか、第二に、過去のスポーツ経験の豊かな人とそうでない人

との間で、レクバレーの参加及びコミュニティ活動への取り組みにどのような相違があるかを明確にすることを目的にした。

II 方 法

調査対象：愛媛県内で継続的にレクバレーに参加している女性894名

調査時期：昭和59年11月

調査方法：質問紙による配票調査

回収率：有効回収数690，有効回収率77.2%

分析枠組

レクバレー参加者を過去のスポーツ経験から、(イ)学生時代（中学，高校，大学など）の運動部経験の有無，(ロ)学校卒業後レクバレーを始めるまでのスポーツ経験の有無によって表1

表1 過去のスポーツ経験による4つのパターン

スポーツ経験 パターン	イ		ロ		N	%
	有	無	有	無		
1 (A)	○		○		269	38.9
2	○			○	88	12.8
3		○	○		173	25.1
4 (B)		○		○	160	23.2

イ：学生時代の運動部経験

ロ：学校卒業後、レクバレーを始めるまでのスポーツ経験

のように4つのパターンに分けた。問題点を明確にするために、学生時代の運動部経験と学校卒業後レクバレーを始めるまでのスポーツ経験の両方有る人（以下A）と、両方無い人（以下B）との比較を主におこなう。

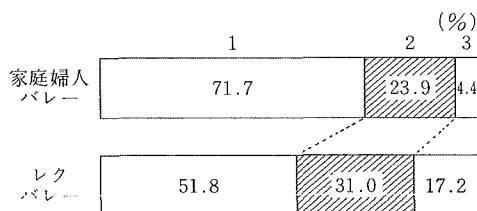
III 結果と考察

1. 過去のスポーツ経験

(1) 学生時代の運動部経験

学生時代の運動部経験の有無をみると家庭婦人バレー¹⁾（愛媛県家庭婦人バレーボール連盟加入クラブ）の場合71.7%の人が運動部へ加入しており、レクバレーの51.8%よりも運動部経験者の占める割合が高い。（図1）

またバレーボール部の経験についても、家庭婦人バレーの人は54.0%が経験しており、レクバレーの23.6%に比較して高い割合を示している。（図2）



1. 運動部に入ってやっていた
2. 運動部には入ってなかったが、スポーツは好きだった。
3. どちらかといえばスポーツは嫌いだった

図1 学生時代のスポーツ経験

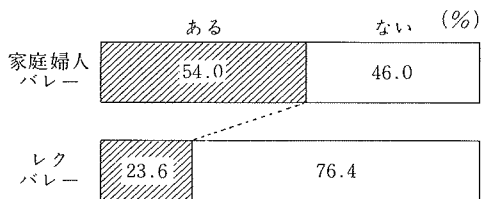


図2 バレーボール部の経験

(2) 学校卒業後レクバレーを始めるまでのスポーツ経験

学校卒業後、64.1%の人が何らかのスポーツを経験している。種目別についてはバレーボールの34.1%が最も多く、バドミントン14.6%、卓球13.9%と続いている。Aの人ではバレーボール経験者が60.2%を占め、バレーボールからレクバレーに移った人が多い。(表2)

表2 学校卒業後、レクバレーを始めるまでのスポーツ経験

項目	M. A. (%)	
	レクバレー	A
バレーボール	34.1	60.2
バドミントン	14.6	21.2
卓球	13.9	19.7
ソフトボール	9.6	16.4
テニス	6.2	10.8
ゴルフ・ボーリング	5.2	5.2
ジョギング	4.8	4.1
体操	4.2	4.5
その他	1.7	2.6
行っていない	35.9	0.0

2. クラブ参加の現状

(1) クラブの性格

クラブの性格についてみると、家庭婦人バレーでは、自分らの仲間で作ったものが56.2%と最も多く、次いで町内会・自治会、スポーツ教室と続いている。一方レクバレーにおいては、町内会・自治会が最も多く、自分らの仲間、スポーツ教室と続いている。(図3) この

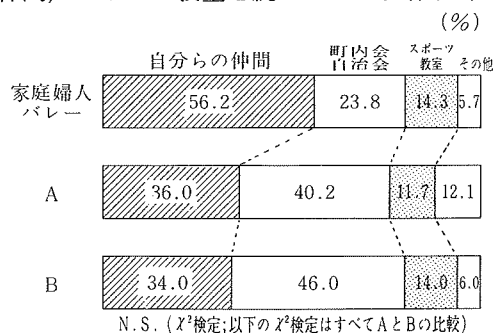


図3 クラブの性格

相違は、家庭婦人バレーが校区単位、あるいはバレーボール経験者の自発的な集まりであるため、仲間をつのって活動しやすいのに対し、レクバレーは、新しく考案されたスポーツであり、初心者を中心に普及をはかる目的のため、町内会・自治会から出来たクラブが多いといえる。

練習回数について、家庭婦人バレーは週2回以上と答えた人が7割以上いるのに対し、レクバレーでは反対に7割弱の人が週1回と答えており、週2回以上練習するクラブは少なく、家庭への負担などの視点からみればレクバレーの方が理想的であると思われる。

練習施設についてみると、家庭婦人バレーではほとんどが学校の体育施設であるのに対し、レクバレーでは約7割が学校の体育施設、残りが公共施設である。

(図5) これは、家庭婦人バレーが早く

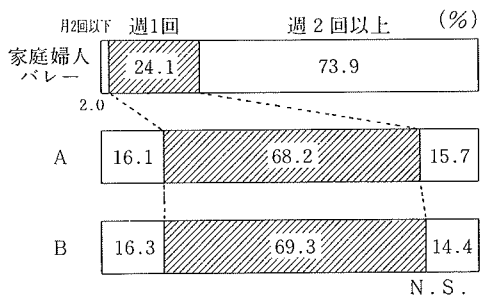


図4 練習回数

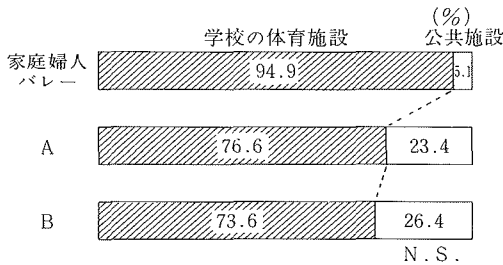


図5 練習施設

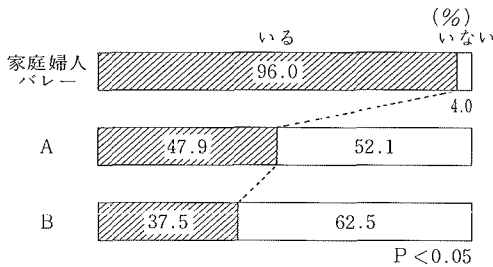


図6 指導者の有無

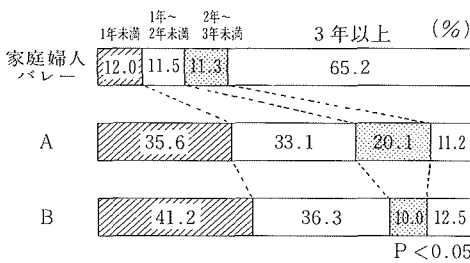


図7 クラブ所属年数

以上の結果から、家庭婦人バレークラブは、早い時期に結成され、自分の仲間で作ったものが多く、また週2回以上練習するものも多く、指導者をそなえた、どちらといえば高度化志向になる性格を有している。一方レクバレークラブは、3年以内に結成され、自分の仲間よりも自治会・町内会の働きかけで出来たものが多く、また練習回数、指導者については少なく、どちらかといえば大衆化志向の性格を有している。

(2) 参加者の意識

参加の動機については、「手軽に出来るスポーツだから」が最も多く、次いで「友人・知人に勧められたから」「体を動かすことが好きだから」が続いている。(表3)両者を比較すると、「手軽に出来るスポーツだから」という項目を除くと、Aの人は、「体を動かすことが好きだから」という能動的な動機で参加している者が多いのに対し、Bの人では、「友人・知人に勧められたから」「地区の役員に勧められたから」という受動的な動機で参加している人が多い。

従って、スポーツ経験の乏しい人の参加を広げるためには、広報の発行やスポーツ教室を

から行われていたスポーツであるのに対し、レクバレーは後から出来たスポーツであるため、学校以外の公共施設に依存せざるを得ない状況を示しているといえる。

指導者の有無について、家庭婦人バレーではほとんどのクラブに指導者がいるのに対して、レクバレーでは4割ぐらいのクラブしかない。(図6)この相違は、レクバレーが家庭婦人バレーほど技術的に高くなく、指導を仰ぐというよりもゲームをみんなで楽しむという形が多いのであろう。またAとBの相違では前者の方に指導者が多い。

クラブ所属年数についてみると、家庭婦人バレーは3年以上所属している人が65.2%も占めレクバレーの約1割に比較すると非常に長い。このことは、レクバレーが考案されてまだ日が浅く、現在普及の途上であることを示している。次にAとBの比較では、前者の方に所属年数の長い人が多い。この理由として、レクバレーでは、過去のスポーツ経験の豊かな人たちが中心の活動から、次第に初心者でも参加できる活動に広がっているものと推察される。

開催してレクバレーの活動を広く紹介したり、加入者の知人・友人に働きかけて参加を勧めるなどの方策が必要であろう。

参加の目的については両者ともあまり差はみられない。両者とも「気分転換・ストレス解消のため」を目的にして活動に参加している人が最も多く、次いで「健康の保持・増進のため」「体力づくりのため」と続いており、「自分の能力や技術を高める」「友人を得るため」と答えた人は少ない。(表4)つまり、身体的・精神的要因を目的にする人が多く、技術的・社会的要因を目的にする人は少ない。

参加して良かった点は、両者とも「気分転換・ストレス解消になった」「よい仲間ができた」をあげる人が多く、参加目的で多かった「健康状態がよくなった」「体力が向上した」はそれほど多くない。(表5)

両者を比べると、Aの人では「良い仲間ができた」「視野が広まり話題がふえた」ような社会的要因をあげる者が多いのに対し、Bの人では「健康状態が良くなった」「精神的に若がえった」「気分転換・ストレス解消になった」などの身体的・精神的要因をあげる者が多い。これは両者のクラブ所属年数の相違によるものと思われる。過去の研究からも、クラブ参加の目的がクラブ所属年数が長くなるにつれて、身体的・精神的要因から社会的要因に変化することが指摘されている。¹⁾

参加するうえで都合の悪い点を示唆する人は、Bの方がAよりも多い。Aの人は「人間関係に苦勞する」「子どもという時間が少なくなる」と答えた者がやや多いが、Bの人では「あまり上手でない」と答えた者が34.4%もいる。(表6)技術レベルの低いBの人をクラブへとけこますためには、上手な人はあまり勝敗に

表3 参加の動機

M. A. (%)

項 目	A	B
手軽にできるスポーツだから	49.8	61.3
友人・知人に勧められたから	39.0	47.5
体を動かすことが好きだから	41.3	21.3
地区の役員に勧められたから	11.9	16.3
よい施設が近くにあったから	8.9	6.9
自分の自由にできる曜日・時間に練習が行われていたから	6.3	15.0
よい指導者にめぐまれたから	10.4	2.5
そ の 他	3.0	2.5

表4 参加の目的

M. A. (%)

項 目	A	B
気分転換・ストレス解消のため	58.7	63.1
健康の保持増進のため	53.2	52.5
体力づくりのため	32.0	34.4
生活を豊かに楽しくするため	14.1	16.3
友人を得るため	8.6	8.1
人間形成のため	4.1	3.1
美容のため	2.6	1.3
自分の能力や技能を高めるため	1.1	2.5
そ の 他	1.9	0.6
無 回 答	0.7	0.0

表5 参加して良かった点

M. A. (%)

項 目	A	B
気分転換、ストレス解消になった	49.8	53.1
よい仲間ができた	51.7	42.5
健康状態がよくなった	28.3	33.1
精神的に若返った	21.2	26.9
視野が広まり話題がふえた	17.8	9.4
体力が向上した	6.3	8.8
技術が上達した	2.6	1.9
美容効果があった	0.7	0.0
そ の 他	0.4	0.0
無 回 答	0.7	2.5

表6 参加するうえで都合の悪い点 M. A.(%)

項 目	A	B
あまり上手でない	10.0	34.4
人間関係に苦勞する	14.9	13.1
子どもといる時間が少なくなる	12.3	8.1
練習場までの距離が遠い	10.4	9.4
練習が終わった後疲れが残る	5.2	10.0
家事が手抜きになる	4.8	4.4
仕事とバレーの板ばさみになる	10.8	4.4
出費がふえる	0.7	0.0
そ の 他	4.5	3.1
無 回 答	45.4	36.9

こだわることなく、試合や練習をするコートの中だけでなく、コートの外においても親睦を図るなどして、人間関係を親密にし、活動を継続しやすい雰囲気を作ることが大切であろう。

(3) レクバレーの面白い点

表7はレクバレーについて、家庭婦人バレーに比較して面白いと思われる点を示したものである。全体では「ボールがやわらかく、こわさや痛みがない」ことをあげた者が約8割を占め、次いで「高齢になってもできる」「全員がすべてのポジションができる」「ルールが簡単である」と続いており、スポーツの初心者、高齢者向きに考案されたレクバレーの目的は、参加者に浸透しているように思われる。

次に両者を比較すると、Aの人はポジション固定の9人制バレーの経験者が多いためか、「全員がすべてのポジションができる」ことをあげる者が多い。またBの人は初心者がバレーボールを始める上で一番の阻害となっている「怖さや痛みがない」ことを88.1%もあげている。また「ルールが簡単である」ことも初心者のクラブ参加にとって好都合な点であろう。

以上の理由から、初心者がレクバレーに参加することで、今まで指摘されてい

表7 レクバレーのおもしろい点 M. A.(%)

項 目	A	B
ボールがやわらかく、怖さや痛みがない	70.6	88.1
高齢になってもできる	59.9	60.6
全員がすべてのポジションができる	59.1	38.1
ルールが簡単である	17.1	40.6
あまり技術に関係しない	28.6	23.8
ボールにさわる回数が多い	9.3	8.1
勝負にこだわらない	7.4	3.8
ラリーがよく続く	8.9	3.1
ネットやコートの広さが手ごろである	0.7	0.6
そ の 他	0.4	1.9

た「コミュニティスポーツの参加はいつも同じメンバーである」という点が克服され、それが契機となって、趣味・学習活動や奉仕活動への参加をうながし、コミュニティづくりに寄与するものと推察される。

3. コミュニティ活動

(1) 趣味・学習活動

過去1年間に実施した趣味・学習活動についてまとめたものが表8であり、Aの人は69.1%、Bの人は51.2%が何らかの趣味・学習活動を行っている。

内容別にみると、両方とも、料理、手芸、華道、子どものしつけと教育が多い。両者の比較では、着付け教室を除くすべての活動において、Aの方に参加者が多い。

表 8 内 容

項 目	M. A. (%)		項 目	M. A. (%)	
	A	B		A	B
料 理	23.8	18.1	民 謡	3.7	3.1
手 芸	24.9	18.1	音楽 (演奏・合唱)	2.2	0.6
華 道	17.1	11.9	音 楽 鑑 賞	3.3	0.6
子供のしつけと教育	16.4	11.3	演 劇 ・ 観 劇	3.0	0.0
着 付 け 教 室	4.5	9.4	詩 吟	2.6	0.0
茶 道	5.6	2.5	琴・三味線・尺八	3.0	0.0
和 裁 ・ 洋 裁	5.2	3.8	謡 曲 ・ 小 唄	1.9	0.6
書 道	4.5	1.9	俳 句	0.7	0.6
民 踊 ・ 舞 踊	5.2	1.9	そ の 他	5.6	3.8
読 書 ・ 文 学	5.6	1.3	行っていない	26.8	42.5
盆 裁 ・ 園 芸	3.7	1.3	無 回 答	4.1	6.3

次に趣味・学習活動の実施場所について、趣味・学習活動を行っている者の中では、両者とも公民館の占める割合が高い。公民館はコミュニティにおける社会教育の拠点であり、公民館の占める割合が高いことは、今後のコミュニティ活動の発展が期待される。

また、地域の人々と一緒にどの程度趣味・学習活動に取り組んでいるかは、上の結果を受けて「積極的に取り組んでいる」と「まあまあ取り組んでいる」ものを合計すると、Aの人は65.4%、Bの人は42.4%と前者の方がよく取り組んでいる。(図8)

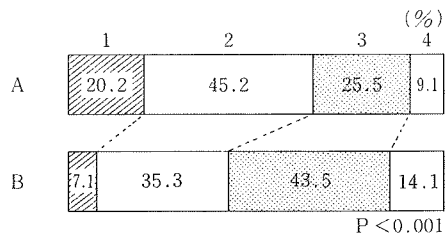
(2) 奉仕活動

奉仕活動の一つである地域の役員経験の有無について、Aの人は92.2%、Bの人は86.9%が何らかの役員を経験している。(表10)

内容別についてみると両者とも、PTA、婦人会、愛護班、保育園、幼稚園の父母の会の経験者が多く、子どもに関する役員をよく引き受けている。両者の比

表 9 実施場所

項 目	M. A. (%)	
	A	B
公 民 館	65.2	75.6
個 人 宅	38.1	34.1
学 校 の 施 設	18.2	13.4
学校・公民館以外の公的施設	16.6	4.9
商 業 施 設	3.9	2.4
職 場 の 施 設	5.0	1.2
そ の 他	1.7	1.2



1. 積極的に取り組んでいる
2. まあまあ取り組んでいるほう
3. あまり取り組んでいないほう
4. 全く取り組んでいない

図 8 地域の人々との取り組み

表10 役員の経験

項 目	M. A. (%)	
	A	B
P T A	72.9	64.4
婦 人 会	43.5	40.0
愛護班 (子ども会を含む)	43.1	34.4
保育所・幼稚園の父母の会	39.4	35.0
町内会・自治会・部落会	26.4	23.1
公 民 館	11.9	3.1
農協・森林組合	7.8	8.1
そ の 他	7.0	3.2
経 験 が な い	7.4	13.1

較では、農協・森林組合を除けばいずれの役員においてもAの者がよく経験し、特に、PTA、愛護班、公民館の役員においては顕著である。

役員経験数においては、両者とも複数以上経験している人が多く、3以上の経験数では、Aの48.0%、Bの39.4%と前者の方がよく経験している。

(3) コミュニティ関与

表11はコミュニティ活動へどのような順序で参加したのかを、趣味・学習、スポーツ、奉仕活動の三類型に分けて聞いた結果である。

Aの人の場合には「趣味・学習→スポーツ→奉仕」の14.8%を除けば、「スポーツ→奉仕」14.1%、「スポーツ」13.1%、「スポーツ→趣味・学習→奉仕」と「スポーツ→奉仕→趣味・学習」が10.4%と続き、スポーツ活動からコミュニティ活動へ参加している

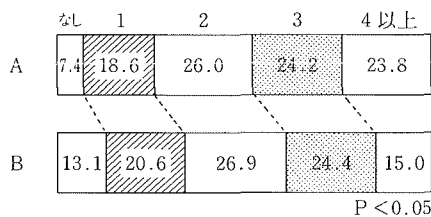


図9 役員経験数

表11 コミュニティ活動への関与のパターン

パターン 順 序	A		B		
	A	B	A	B	
a → b → c	14.8	8.1	a → b	4.5	1.9
a → c → b	4.5	6.9	b → a	0.7	2.5
b → a → c	10.4	3.8	b → c	14.1	13.8
b → c → a	10.4	3.8	c → b	7.8	10.0
c → a → b	3.7	5.0	b	13.4	24.8
c → b → a	8.6	3.8	無 回 答	7.1	15.6

a : 趣味・学習 b : スポーツ c : 奉 仕

者が多い。一方、Bの人の場合には「スポーツ」が24.8%と最も多く、次いで「スポーツ→奉仕」13.8%、「奉仕→スポーツ」10.0%、「趣味・学習→スポーツ→奉仕」8.1%、「趣味・学習→奉仕→スポーツ」6.9%と続き、スポーツ活動から参加

している者と他のコミュニティ活動からスポーツ活動へ参加している者に分かれている。

また、趣味・学習、スポーツ、奉仕のどの活動にも参加している人は、Aの52.4%、Bの31.4%であり、前者の方がコミュニティ活動への高い参加率を示している。

これらの相違の理由としては、Aの人が早い時期からスポーツ活動などを通して地域の人々と接する機会が多かったため、コミュニティ活動への取り組みが広がったのに対して、Bの人では、レクバレーが最初のコミュニティ活動である人が約半数を占め、ようやく他のコミュニティ活動への参加が始まりだしたからといえる。従って、コミュニティ活動の場あまり広がりがない人も、レクバレー活動歴が長くなれば、Aのように他のコミュニティ活動

へも参加していくものと期待される。

IV 結 語

(1) 過去のスポーツ経験の乏しいBのタイプの方は、レクバレー参加者の中で約23.2%であり、これからはこのタイプの参加者をもっと増やす必要がある。

(2) レクバレーは家庭婦人バレーの問題点として指摘されている高度化志向の傾向はいまのところみられない。

(3) 参加の動機について、Aの方は主に能動的な動機で、Bの方は受動的な動機で参加している。また両者ともクラブ活動を継続するにつれて、参加目的が身体的・精神的要因から社会的要因に変化している。

(4) レクバレーの面白い点として、Aの方はローテーション制に面白さを感じているのに対し、Bの方はボールに対する恐怖感や痛みのなさ、簡単なルールに良さを感じている人が多い。また両者とも高齢になってもできる点に良さを感じている。

(5) コミュニティ活動においては、すべてにわたってAの方が積極的に参加している。一方Bの方は、レクバレーが最初のコミュニティ活動である割合が高く、今後このレクバレーを契機として、コミュニティ活動へ参加する人が増えるものと期待される。

本研究に御協力をいただいた愛媛県家庭婦人バレーボール連盟の黒田美勢子氏及び東予市三芳町、丹原町、松前町、久万町、宇和町の教育委員会の方々に深く感謝の意を表わします。また現地調査及び資料整理等に協力を惜しまなかった西本京子嬢（中津小学校教諭）に記して謝辞としたい。

参 考 文 献

- 1) 堺賢治, 藤原誠「家庭婦人バレーボールに関する研究—家庭婦人のクラブ参加とコミュニティ活動—」愛媛大学教育学部紀要 第1部 第28巻 pp. 179-185 1982
- 2) 徳永敏文「家庭婦人バレーボールクラブにおける競技志向—岡山市内のバレーボールクラブを中心として—」岡山大学教養部紀要 第18巻 pp. 346-371 1982
- 3) 徳永敏文「家庭婦人バレーボールクラブにおける競技志向—その2—岡山市内のバレーボールクラブを中心として—」岡山大学教養部紀要 第20巻 pp. 329-348 1984
- 4) 堺賢治, 藤原誠「コミュニティスポーツとコミュニティ活動に関する研究—公民館レベルを中心にして—」愛媛大学教育学部紀要 第1部 第29巻 pp. 143-150 1983
- 5) 堺賢治「コミュニティスポーツとコミュニティ活動に関する研究(2)—農民の公民館レベルを中心にして—」愛媛大学教育学部紀要 第1部 第31巻 pp. 157-164 1985
- 6) 小島秀俊「痛くないバレーボールの指導—ビーチボールのミニバレー—」学校体育 pp. 39-43 1983, 6
- 7) 荒木修身「ビーチバレーボール」みんなのスポーツ pp. 40-41 1985, 4